

池田文書の研究 (45)

医師の書簡 (その4)

池田文書研究会

[41] 榎村清徳執事の書簡

榎村清徳の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に3通掲載した。その執事の書簡を掲載する。榎村清徳は明治14年東大教授。17年ドイツに留学。翌年帰国後東大教授を辞し山龍堂病院を開業。

4 明治18年12月17日 (1463)

拝啓、陳ハ榎村清徳事本日入港之ベルキーク号ニテ帰着之赴キ電報有之、本日后二時横浜発之汽車ニテ帰京之筈ニ付帰宅之上ハ早々御礼旁可罷出義ニハ候得共、不取敢無事帰朝之御報迄申上候也
十八年十二月十七日 榎村清徳 執事
池田謙齋殿

[42] 片山芳林の書簡

片山芳林は明治22年より侍医を勤める。芳林の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に6通掲載に付き省略。

[43] 桂秀馬の書簡

桂秀馬は明治22年より侍医を勤める。秀馬の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に5通掲載に付き省略。

[44] 加藤照磨の書簡

加藤照磨は明治21年より侍医を勤める。照磨の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に3通掲載に付き省略。

[45] 加藤祐善の書簡

加藤祐善は明治13年頃熊本鎮台病院・明治20年名古屋鎮台病院勤務。一等軍医。明治20年12月没。

1 明治 年1月2日 (1427)

恭賀新年

二白申上候、陳は昨年来意外之御不沙汰仕、失敬之段平ニ御海宥被成度、伏して奉希上候、扱当地モ旧冬来殊之外晴続ニて暖気ヲ帯ヒ、已ニ臘梅モ三分ノ一ハ綻ヒ暗ニ春光ヲ催シ大ニ凌安キ事ニ御坐候、十二月中旬ニハ神風トカ何とカト申ス者少々集合致したと之事ニ候へ共、此モ未発ニ静定、其他先々穏静の方ニ御坐候、市中ハ内々大不景氣ノ様子、物価ハ東京と相類ス、只安直ナルハ牛肉芋みかん類ノミニ御坐候、医学校生徒ハ充滿各隊共病者寡ク入院患者卅名計、只祈ル所ハ虎列刺症ヲ未発ニ撲滅仕度、実ニ昨年ニハ寒胆仕候、旧冬御地之大火ニハ驚入申候、定て御混雜被遊候御事と奉拜察候、書外後便ニ万々拝啓仕度、右御左右御同慶早々如此ニ御坐候、恐々敬白

一月二日 加藤祐善 九拜
池田先生 閣下

2 明治 年9月5日 (1428)

一翰拜啓仕候、時下残暑之候ニ候得共、先生益々御勇健ニ被為在候段奉^レ賀候、陳は昨年中不浅蒙御配慮候稲垣銀治事、御影様ニて漸々快方ニ相成り大喜罷在候処、先月廿六日頃より感冒之氣味ニて熱発、右胸痛等之症ヲ訴フ、廿七日午後六時体温38.9脈120呼吸22舌苔薄ク四五日来尿快通セス、食機振ハス、咳嗽咯痰粘性、左胸部ハ輕微濁音昨年来之通り、右胸部異状ナク、左第三肋上ノ水泡音昨来自若タリ、右第六肋間乳腺部ニ吸氣之際水泡ノ音ヲ聴取ス、又同部ニ圧重微痛等ヲ訴、右之症状ニヨリ廿八日ヨリ左方ヲ処ス

楊皮酸⁽¹⁾十五グレイン為丸一日頓服

ジキタリス^(ママ)⁽²⁾ 廿m
 老宇利兒水⁽³⁾ 一オンス
 礪砂加苗香精 廿m
 水 三オンス

右胸冷電法

芥子泥

加累タス泉⁽⁴⁾ 半オンス 二回分服
 九月一日二日 体温 37.8 ニ降レリ
 九月三日 体温 38.5
 九月五日 体温 38.5 脈 95

右之容体ニ御坐候へは御多用之御中も不顧恐縮之至ニ御坐候得共、又々蒙御配慮度何卒御高案之上御処(方)御教示被成下度伏して奉懇願候、右御願迄如此御坐候、頓首々々

九月五日 加藤祐善 拜
 池田謙齋先生 閣下

- (1) 楊皮酸 サルチル酸. 解熱剤.
 (2) ジキタリス剤 利尿剤・心臓病剤.
 (3) 老宇利兒水 ローレル水. 鎮咳剤・麻酔剤.
 (4) 加累タス泉 カル、ス泉. 緩下剤・消化剤.

3 明治14年7月21日 (1429)

(封筒表) 東京駿河台北甲賀町(欠)五番地
 (欠) 医監 池田謙齋殿 御侍史
 (封筒裏) 緘 肥後国熊本鎮台第十九番官舎
 第三室 陸軍々医副 加藤祐善

(上下押印)

七月廿一日(消印 東京一四年・七・□□・に)
 過日は態々蒙尊翰難有拜見仕候処、時下逐日暑気増度之候ニ候へ共、尊体御初皆々様御揃^(ママ)へ益々御清適御坐被為在候段遙ニ奉拝賀候、尔来久々之御疎音ニ打過今更遜辞之設も無之候得共、平ニ御海有被成下度奉懇願候、右は暑中御左右御伺迄如此ニ御坐候、折角御厭暑之程奉祈願候、頓首々々

七月廿一日
 副啓、菅沼君も無恙勉勵且此程ハ山砲兵副医官被仰付候、自今共ニ勉強致度候間、乍憚御放念被下度候
 加藤祐善 九拜
 池田謙齋先生 閣下

[46] 北尾漸一郎の書簡

北尾漸一郎は松江藩の医学校教授兼病院長。廃藩後軍医。明治11年東京にて内外医院開業。漸一郎の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に9通掲載した。未掲載分を記す。

10 明治 年11月14日 (1598)

拜呈、冷氣相増候処益御安寧奉拝賀候、陳ハ松平直亮長女⁽¹⁾五六日前より便秘ヲ起シ肚間少々疼痛有之候様相見え、一同心配罷在候ニ付一応御診察相願度、且又甚々我儘之儀願兼候得共午前十一時頃毎日午睡仕、其頃ナレハ御診察も十分可被成下候間、万一御縁合相成候へハ別て難有奉存候、右小生參上御願可申上之処取急書面ヲ以奉願候、此段御仁免可被下候、書外拜謁可申上候、早々敬白

十一月十四日 北尾漸一郎
 池田様 御取次中

- (1) 松平直亮^{なおあき}は出雲松江藩主家出身。慶応元年生まれ昭和15年没。貴族院議員。伯爵。享年76。(1865-1940) 長女貞子は明治21年生まれ大正2年没。子爵 鍋島直和^{なおかず}(肥前蓮池)夫人。享年26。(1888-1913)

[47] 北里柴三郎の書簡

北里柴三郎は伝染病研究所・北里研究所設立。慶応大学初代医学部々長。柴三郎の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に1通掲載に付き省略。

[48] 北村徐雲の書簡

北村徐雲^{いずし}は兵庫出石出身。陸軍々医正。生年不明。明治20年東大医学部卒業。日露戦争時兵站軍医部長。39年より40年ドイツ自費留学。44年12月熊本にて没。『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻石黒忠憲の書簡に同封された北村徐雲の書簡あり。

1 明治 年4月14日 (1578)

一書拜呈仕候、時下春暖之候先生益御清適之由奉

欣賀候、降て小生儀医科大学卒業後大学院ニ入り胃病ヲ専ラ研究仕度存候処、大学之規則変リ、且一身上之都合ニ因リ昨年九月宮城医学校教諭兼付属医院医科長ニ命ヲ承ケ、幸ニ生徒患者ニ信ヲ得、先月迄勤務致居候、然ルニ先月ヲ以テ宮城医学校モ第二高等中学ニ合併サレ廃校ニ相成候ニ付、当福島病院副院長月俸百二十円ニテ雇ハレ、本月初メヨリ病院へ出頭奉職仕居候、小生在京中且在仙中共幸ニ身体ハ至テ丈夫ニテ消光致候処、氣候ノ変リシ勢ニヤ又ハ飲用水不良之為ニヤ赴任後身体異和ヲ覚候、只ニ小生ノミナラズ愚妻并ニ愚弟ニ至ル迄消化器病又ハ呼吸氣病ニ侵サレ困却致居候、因テ他之氣候ヨキ地ニ転度存居候、兎ニ角今後一兩年ハ地方病院ニ奉職仕、大学ニテ学ビシ学理ヲ実地ニ適用仕、医ノ学術ヲ研究仕度精神ニ御坐候、一兩年ノ後ハ是非トモ先生之御引立ヲ蒙リ宮内省ニ奉職仕度候、何卒此義宜奉願上候、尤モ来年三月迄ハ当病院へ奉職仕事ニ取キメ候、其内不幸ニシテ病ノ為メニ斃ル、モ致方ナキ事ト覚悟致居候、当地ハ御存之通昔湖水ナリシ地ヲ町街ニ致セントノ事故、病人割リニ多ク毎日病院へハ患者百名以上来候、其内尤モ多キハ呼吸器病消化器病、次ニ眼病ニ御坐候、子宮病之内臍部肥大、慢性子宮内膜炎ノ患者意外ニ多ク御坐候、市中開業医ハ十二名ニシテ此内流行家（毎日薬取トモニテ五六十名）二三軒、管内開業医ハ漢洋折衷家十中七八ヲ占居候、物産ハ生糸ニテ金融ハ随分東京以北屈指ノ良キ場所トノ事ニ御坐候、病院經費ハ一万三千円位有之候、当病院ノ他県病院ニ負ル所ハ重ニ管内諸郡ノ開業医奨励之為メ、且患者診断治療之為メ常ニ三回正副院長巡廻致ス規則有之事ニ御坐候、小生義ハ未ダ黄口之医生ニ御坐候ニ付、病人ヲ実地ニ多ク扱ヒ学理ニ照シ研究スルニハ宜敷キ土地ニ御坐候、小生ハ専ラ病人治療ト管内医ト共ニ学理ヲ論スルコトヲ引受居候、院長木脇良君ハ御存之通老練家、殊ニ知事公ニ信ヲ得居ラル、ニ付維持ニハ至テ宜シク候、小生木脇君ニ万事従ヒ同君ヲ助ケ病院内一致結合シテ益患者之信ヲ得、福島県ノ医学ヲ進メ地方ニ多キ病ヲ治スル事ヲ勉ムル心得ニ御坐候、巡廻ハ随分雪中山間中ヲ致スコト故、苦敷由ナレドモ精神ヲ強クシ植

物家ガ植物採取之為メニ山中岩路ヲ跋涉スルヲ厭ハサルニ習ヒ度存居候、只氣候ノ為メニ斃レザル様致度候、乍末筆閣下ハ我国医家之最上ノ地位ニ居ラル、御身、殊ニ天皇陛下之健全ヲ保護サル、重責之御身故、折角時下御自愛專一ニ被遊様奉希願候、先ハ尔来御不音之罪ヲ謝シ、且後來若シ用ユヘキト思召ハ宮内省ニ御採用被下度偏ニ奉願候、尤モ月給等ハ先生之御思召ニテ何程ニテモ宜敷候、此段一寸申上置候、小生モ時々上京仕、朋友ニ面会シ日進ノ医術ニ後レザル様致度存居候、草々頓首

四月十四日

北村徐雲

池田先生 閣下

2 明治 年9月8日 (1579)

一書拜呈仕候、時下残暑甚（敷）御坐候処、高堂益御清穆之由奉欣賀候、降て小生無異ニ消光罷居候間、乍憚御降心被下間敷候、就てハ閣下ニ是非御願申度件有之、此頃石黒先生迄申上置候間、同先生ヨリ小生一身上ニ付御談有之候節ハ何卒宜御引立被下様奉願上候、草々頓首

九月八日

北村徐雲

池田先生 閣下

[49] 久城籍五郎の書簡

久城籍五郎は明治13年東大医学部別課卒業生。

1 明治13年1月27日 (1633)

(包紙) 池田先生 閣下

旧八期生一統 右総代 久城籍

肅啓、時下寒冷之候尊位御清穆奉恭喜候、陳ハ微軀等廿四名数年之間蒙御教育御提掣ニ由テ明廿八日卒業證書拜受之佳期ニ際シ実ニ一同之幸福此上無ト雀躍仕候、依之御營式之本日御式ノ終ルヲ期シ上野公園地内精養軒ニ於テ不顧不敬聊微志ヲ表セン為メ菲薄ノ餽餐ヲ奉捧度候間、微衷ヲ咎メラレス御臨席被成下候得ハ生等一同之光荣不過之ト奉存候、恐惶謹言

明治十三年一月廿七日 旧八期生 一統

池田先生 閣下

[50] 熊谷茂樹外の書簡

熊谷茂樹は明治15年東大医学部卒業。明治26年5月山口にて没す。石川公一は明治13年東大医学部卒業。公一の書簡は日本医史学雑誌第58巻第3号に記載。長尾精一は明治13年東大医学部卒業。千葉医専学校長。35年7月没。

1 明治16年1月1日 (1564)

新年之慶節祥雲瑞ヲ呈シ万邦拊舞内外有ルナシ、特ニ惟フ玉体清勝多福何ソ限ラン、生等亦無異爰ニ馬齢ヲ加フ幸ニ念トスル勿レ、陽春之儀節ヲ賀センカ為メ伏シテ寸楮ヲ呈ス、稽首

明治十六年一月一日 千葉医学校

熊谷茂樹

石川公一

長尾精一

池田謙齋様

[51] 隈川宗悦の書簡

隈川宗悦(宗雄)は安政5年生。旧姓原宗雄。隈川宗悦の嗣養子となる。明治16年東大医学部卒業。同年ベルリン大学留学。医化学専攻。大正6年東大医科大学長就任。翌7年没。享年61。(1858-1918)

1 明治 年9月4日 (1574)

寸楮拜呈仕候、然は当家患者先日来再応御来診被成下難有仕合ニ奉存候、且御高按も御教示被成下早速参館御礼可申上之処彼是多用ニ取紛れ未タ御不沙汰申上居候段平ニ御仁恕奉願候、扱当患者御示し之通り腸テヒユスニ相違間敷奉存候ニ付、去月三十一日初診後引続キニー子⁽¹⁾并稀塩酸リモナーテ⁽²⁾相用居申候事ニ御坐候、初メはキニー子一日十二グレインツ、相用候処、次第ニ熱度増進候間、過ル二日より一日十四グレインニ増し申候、然ルニ今日至り候テハ余程熱度相減し(熱度表ニテ御承知被下候)申候ニ付、一兩日前量ニテ持長いたし置可申哉と奉存候得共、尚御高按之程御示し被成下候様奉懇願候、先は先日来之御礼申上度、旁々向後之処御教示ニ預り度迄如此ニ御坐候也

九月四日 認メ

隈川宗悦

池田先生

(1) キニーネ 解熱剤.

(2) 稀塩酸リモナーデ 含嗽剤・消化促進剤.

2 明治 年9月11日 (1573)

奉拜呈候、然ハ四ツ谷仲町河久保行忠方へ先日來數々御來診被成下難有仕合万々御礼申上候、扱該患者過日御來診被成下候節、舌上悪しく候間、注意可致旨御示し置被下候ニ付、日々注意罷在候処、彼ノ舌苔ハ剥離いたし跡は赤色ニしてヅラヅラいたし甚不宜候間、若シヤ下血ヲ相発し候前徴ニは有之間敷と心配罷在候処、果シテ今朝より兩度下血有之候、乍去之カ為メ少シモ衰弱相増し候様ニも無之、脈度も六十六ニして力あり氣力もよろしく御坐候得共、何様下血之一症ニおいてハ不宜と存候、体温も八日九日十日之三日ハ大抵朝夕とも三十八度三分之処ニテ据へ居申候、本日ハ少々相昇り三十八度半ニ至り申候、右之病状ニ付、先日より仰ニ随ひキニーネハ一日十グレインニ減量いたし候、其外少シク強壯剤として単カリサヤエレキシル一日一オンスツ、相用昨夕より牛乳エブーランチャー少許ツ、加へ一日量一オンスを數回ニ相用、口内ハボラX三ドラクマ、水十オンスニ溶解セしものにて含嗽セしめ置候処、今朝來下血有之候ニ付、今夕より左之通り転方いたし置与ひ置申候

第一号水劑

単カリサヤエレキシル 一オンス

テレメン油 十二滴

水 二オンス

右一日三回ニ分服

第二号水劑

麦奴流動エキス⁽¹⁾ 一錢

水全量 三オンス

右一日三回ニ分服

ブランデー飲料は前の通り与ひ申候

キニー子は、明朝は先ツ見合置、御診察相願候上撤曹⁽²⁾等ニ換ひ可申哉、又兩三日休ミ候上可相用哉と致し差扣置申候、右之都合ニ御座候間、

何卒明十二日御来診被成下御高按御示被下候様偏
ニ奉懇願候也

九月十一日 夕認む 隈川宗悦
池田先生 御座下

- (1) 麦奴^{ぼくど}流動エキス 止血剤。
(2) 撤曹^{てつそう} サルチル酸ソーダ。解熱剤・鎮痛剤。

3 明治 年 9月 13日 (1572)

四ツ谷河久保行忠病状申上候処、御念之被為入御返書頂戴恐入奉存候、扱該患者下血も相止ミ、他ニ異状無之候処、昨日来キニー子相止メ居候故乎体温は少々相増し三十八度八分ニ相昇リ本人も殊の外心配いたし候ニ付、又候今晚キニー子十グレインを二回ニ相用、明日は午前ニ十二グレインを三回ニ分服させ候積リニ申上置候、将又下血相止ミ候間、麦奴流動エキスは今日切ニテ相止メ候積リニ御坐候、カリサヤエレキシル・テレメン油合剤は明日も相用置、且ブランデー飲料は本人も欲し候間、其促与ひ候積リニ御坐候、右之次第ニて何卒明十四日御差繰御来診被成候様偏ニ奉懇願候也

九月十三日 夕認む 隈川宗悦
池田先生 閣下

[52] 甲野^{こうのあきら}斐の書簡

甲野斐は明治 14 年東大医学部卒業。眼科医。

1 明治 年 月 日 (1640)

過刻は昇堂尊暇を妨げ奉謝上候、其節御願申上候患者ハ天神町壱丁目七拾壱番地ニ住居致居候間、御帰途之節御一診被下度其段奉懇願候、書餘拜眉之上萬謝可申述候、頓首

即日 甲の斐 拜
池田謙斎様 侍史下

[53] 後藤新平の書簡

後藤新平は愛知県公立病院長・東京市長・内務大臣歴任。新平の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に 2 通掲載に付き省略。

[54] 近藤良薫の書簡

近藤良薫は三河国出身。明治 3 年横浜にて早矢仕有的・シモンズに医学を学ぶ。横浜医師会のリーダーとして活躍。

1 明治 年 12月 16日 (3313)

愈御健勝御勤務可被為在奉拝賀候、然は先頃より陸軍ニて出征中之御調相始り非常之御多忙当分御出港難被下旨、態々御報知被下置千万奉敬謝候、尚々御閑隙被為渡候得は何卒御来車之程奉願候、其後病者之体温認め置、即チ別紙ニ供高覧候、且御指示之通り芥子泥ヲ貼しタンテン鬮相用ヒ先々格別之下痢ハ無御坐候得共兎角荏苒之姿ニ御坐候、何分経久之下痢ニ相成、余程腹力モ脱し漸々衰弱相増し候ニハ閉口仕候、猶御高論奉願度別紙葉相添此段奉申上候、右登門可奉申上之処、先老応以寸楮如斯御坐候、草々頓首敬拜

十二月十六日 近藤良薫 拜
池田先生 御侍史

再呈、(欠) 可仕心組之処 (欠)

[55] 佐方潜蔵の書簡

佐方潜蔵は明治 16 年ドイツ自費留学後札幌病院長。24 年侍医局勤務になり、28 年まで勤める。

1 明治 年 7月 1日 (1723)

(欠) 随て暑 (欠) 処御病痾 (欠) 被為入候哉、新誌上ニ (欠) テ近日御転地被遊候趣拜見 (欠)、此れ必竟漸々御佳方ニ被 (欠) 候結果と祝賀候、尚此上ハ (欠) 養一日も速ニ御快 (欠) 上国家之為御尽力 (欠) 成下候様奉希候、元来東京 (欠) 発前参邸直々御様子 (欠) 伺可申上管之処、(欠) 宮殿下之御違例之為 (欠) 切之有様ニテ外出不 (欠) 叶、次テ当地へ御転地被為遊 (欠) 様之御都合ニテ為ニ被念御 (欠) 音仕候、何分御海容奉 (欠) 候、(欠) 殿下も御転地後御食 (欠) 気少しハ被為振御体温御上昇被為遊候事も御坐候へ共、高キも三十七度七分位ナリ (欠) 御宜敷方ニ奉伺候、富美宮殿下⁽¹⁾ 御在京中、腸胃加答児之御症ニ被為罹 (欠) 候処、頃日ニ至り全ク御快 (欠) 被為遊御機嫌至テ御宜 (欠) 奉伺候、先ハ御機嫌

伺旁々如斯ニ御坐候、勿々敬具

七月一日 佐方潜蔵・加藤照磨・石川公一
池田先生 玉坐下

(1) 富美宮殿下 明治天皇第8皇女。明治24
年生。昭和8年没。享年43。(1891-1933)

(注) 手紙の上部破れ多し。

2 明治25年8月6日 (1722)

(封筒表) 東京駿河台北甲賀町九番地

侍医局長 池田謙齋殿 坐下

(消印 廿五年八月六日ハ便)

(封筒裏) 箱根宮ノ下 佐方潜蔵

(消印 武蔵東京 廿五年八月六日ヲ便)

拝啓、酷暑之候ニ御座候処、先以時下無御変倍御
清祥欣賀此事ニ奉存候、陳殿下打続御機嫌能被為
在候間此段御休心可被下候、先日ハ御書面被下
早々御返書可差上之処、調度石川氏婦京直々御聞
及可仕事と相考御無沙汰仕候段平ニ御容赦之程偏
ニ奉願上候、当地も御婦京後所詮雨天勝ニて朝夕
ハ冷氣大仕合仕居候、今日御容体書差出置申候間
右趣御承知可被下候、先ハ御無沙汰御詫旁々御起
居御伺申上度如此御座候、早々

八月六日 潜蔵 拝
池田局長殿 坐下

[56] 相良元貞の書簡

相良元貞は代々佐賀藩医家にて天保12年生れ。
相良知安の弟。大学東校のスタッフで明治3年12
月池田謙齋と共にドイツ留学。8年帰国後病没。
享年35(1841-1875)。本書簡はドイツにて借用し
た金銭を池田留守宅に返済したものと思われる。

1 明治8年6月27日 (1714)

記

一 独乙銀百ターレル⁽¹⁾

代金七拾五円三拾零銭式厘五毛

右金御宿元え御返却之御約束ニて御座候条御落手
可被下候也

亥⁽²⁾ 六月廿七日 相良元貞
池田謙齋様 御内

(1) ターレル Thaler. 15世紀末より19世紀
にかけてヨーロッパ各地で通用した銀貨。ド
イツでは永く貨幣単位として使用された。

(2) 亥は明治8年乙亥。

[57] 佐々木東洋の書簡

佐々木東洋は脚気病院主任を経て杏雲堂医院を
設立。東洋の書簡は『東大医学部初代総理池田謙
齋』下巻に5通掲載に付き省略。

[58] 佐竹重義の書簡

詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治 年4月13日 (1751)

一簡拝呈、愈御壯健奉賀候、少子不相変碌々消光
仕居候、御休神可被下候、毎度患者指出御手数恐
縮罷在候、陳は此仁ハ弥平男田嶋有矩と申者ニ御
座候処、昨秋ヨリ疾病ニ罹リ未全治不仕候間、同
人指出候間御高診奉願候、尤患者義平素神経家ニ
御座候処、昨秋愛子病死仕候後漸々昨今ノ症候ヲ
呈シ候間、依ト昆垓児⁽¹⁾ ナラント愚診仕、臭加キ
ナ液⁽²⁾ 等ヲ投与仕置間、先生ニ宜被仰上御診断ノ
程伏奉希候、詳細ノ義ハ同人ヨリ可申上、早々如
此御座候、頓首

四月十三日 佐竹重義
小原様

二白、田嶋林平婦村後大ニ宜様奉存候、咳血共
ナシ、薬用撰生専一ニ致サセ置候、昨今ノ様子
ニテハ壯健ニ相成可申哉と同人モ大ニ熹居申
候、先生ニ宜被仰上可被下候、有矩ノ病名御主
方御手数被仰聞可被下候、不具

(1) 依ト昆垓児 ヒポコンデリー。心身症。

(2) 臭加キナ液 臭化加里キニーネ液。神経
痛等広範な症状に効あり。

[59] 里見文建の書簡

詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治 年8月2日 (1777)

今朝須加田岩蔵事、昨日より腰部より下肢へ水腫

相増難渋致候間、本日御見舞願度申参候ニ付、薬剤は水散前方一日分相遣し申置候間、御繰合せ御廻診奉願上候也

八月二日

里見文健

池田先生 閣下

[60] 佐藤進の書簡

佐藤進は第3代順天堂々主。進の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に23通と日本医学雑誌第57巻第1号に1通掲載に付き省略。

[61] 佐藤尚中の書簡

佐藤尚中は第2代順天堂々主。尚中の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に1通掲載に付き省略。

[62] 実吉安純の書簡

実吉安純は海軍々医監等歴任し海軍医治衛生制度を確立。安純の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に1通掲載に付き省略。

[63] 猿渡常安の書簡

猿渡常安は信州諏訪出身。嘉永2年生まれ。侍医猿渡盛雅の養子。神田で医院開業。渋沢栄一の治療医。明治32年没。享年51。（1849-1899）

1 明治 年7月13日 (1845)

拝啓、陳は渋沢栄一君御家内昨日来下利症ヲ起シ吐ハナシ、恐ラク感冒ヨリノ腸カタル症ト診断罷在候処今晩来音声発シ甚タ衰弱、時節柄一同心痛罷在候間、御繁用之御中奉恐縮候得共御繰合早刻御来診奉願上候、此段呉々も奉頼候、大取込尊顔之上詳細ハ可申上候、早々頓首

七月十三日

猿渡常安

池田大先生 閣下

尚々、養父も不刻可参之処至急ヲ要スルニ付乍失敬小子より願上候、主人初メ一同呉々願上候、乱筆御用捨奉願上候、以上

[64] 猿渡盛雅の書簡

猿渡盛雅は明治8年侍医を勤める。盛雅の書簡

は『東大医学部初代総理池田謙斎』上巻に3通掲載に付き省略。

[65] 清水郁太郎の書簡

清水郁太郎は東大初代産婦人科教授。郁太郎の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に1通掲載に付き省略。

[66] 神内由己及び妻 甲子の書簡

神内由己は明治12年東大医学部卒業。池田謙斎の義妹甲子と結婚するが間もなく離婚する。

1 明治 年 月9日 (1032)

久々御無音ニ打過候得とも、御尊台御揃御健勝之条奉賀候、当方小生碌々消光罷在候間御放念可被下候、さて今般高橋正純⁽¹⁾より御依頼申上呉候条申出候ニ付一書拝呈仕候、非別義、同人忝高橋茂ナル者、兼て医学部正則ニ入校罷在候所、本年正純妻死亡仕り其砌右茂も帰省仕り、久々帰阪仕候後上京仕候処、最(欠)学部ニ於て(欠)籍ヲ删除し(欠)不出来由にて、正純も甚タ迷惑仕り、是非入校為致度積り、去リナカラ何レ帰省ノ願届等充分之手数ヲ経ス、由テ生徒ノ名籍ヲ除カレ候事と奉存候得とも、其辺ハ明了相分り兼候間、甚タ以御手数恐入候得とも、右願届不都合之義御詮儀被下、何分ノ御所置ヲ以テ再入校出候様御取計被下候得は難有奉存候、尤モ久々決席致候ニ付下級へ御編入相成候義ハ一向不苦候間、此段正純よりは是非御尽力被成下候様御依頼申上呉候様申出候、同人も一男子ニテ何レ医学部卒業ノ上ハ洋行為致候心組にて、当時ハ日夜奔走、資金ノ用意も被致居り候得共事情御洞察之上よろしく御取計之程奉願上候、先ハ右御依頼まで如此ニ御坐候

(欠) 九日

神内由己

池田大学総理殿⁽²⁾

(1) 高橋正純 大阪府病院長勤務後高橋病院開業。正純の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に2通掲載。

(2) 池田謙斎は明治14年7月まで東大医学部総理を勤める。

2 明治(15)年(2)月18日 (1034)

愈御壯清之事と奉察上候、在京中ハ一方ナラサル御高慮ニ預リ難有奉存候、乗船までの景況は御母上さまより御承知被下候事と奉存候、船中ハ未曾有之平穩ニて同行入船気付候者ハ一人も無之候、十四日午前四時神戸へ着、兼て迎人同所まで参り居り、小生ハ至急帰阪可致義出成、第二番発之汽車ニテ帰宅候処、大阪ステーションへ医学校生徒一同出迎ニ参り居り直ニ病院へ出掛申候、おきねハ神戸ニテ結髪為致、十時五十分之汽車ニテ、おこま・豊太郎同道帰阪仕候、同所ステーションまで緒方八千重さま⁽¹⁾并ニ九重さま⁽²⁾も出迎ヒ居り直ニ帰宅仕候、且拙家ニテ緒方老母公⁽³⁾待受け居り、万々好都合ニ御坐候、神戸より無事着之電報差出し候ニ付御承知被下候義と奉存候。○早速書状可差出心得ニ御坐候処、内外要事多端来客多ク今日まで延引候段御海恕可被下候、兼て御相談申上候結婚当日之諸費折半之御約束ニ候処、実ハ小生も今回は非常之入費相掛り御地ニても少々借金致し候様之仕合ニテ事情石黒君まで申置、同君万々承知致し呉候義ニ付、同人より御承知可被下候。○おきねノ買物等ハ緒方老母周旋致し呉レ居り候、猶又土産物之義ニ付当地之風習も在之、緒方老母種々計呉候義も御坐候得とも此義ハ同君より巨細可申上と被申居候間左様御承知可被下候、御母上さまはしめ姉上さま⁽⁴⁾并ニ御叔父母様方へ今回ハ御無沙汰仕候間、尊兄より可然御鳳声願上候

十八日 由己
謙齋大兄 梧下

- (1) 緒方洪庵の4女八千代. 適塾後継者 緒方拙齋の妻.
- (2) 緒方洪庵の5女九重. 軍医堀内利国の妻.
- (3) 緒方洪庵の妻 八重子.
- (4) 池田謙齋の妻 幾子.

3 明治(16)年(1)月 日 (1221)

返々も寒も近く相成さむさいやまし候まゝ、其御身御大切に御保養可被遊候、筆末乍よし田様・岩元様えもよろしく御鳳声御願申上候、

皆々様えよろしく申上候、めてたくかしく新年の御ことふきたてならへたる初日の旗のかゝやきあへるにきはしき、何国もおなし御事といはひ納候、先々御雙親様御はしめ御揃御超歳遊ハされる御事限り無御悦申上候、こゝもと一同無事にとしをそへ候間、はゝかり様乍御意安く御思召可被下候、左候へハとふよりとふより文にて御伺ひ申上候筈の所、私もはしめての一月に御坐候て相成れ不申候故、つひつひ取まき大延引申上候ため御めん被下候、秀男さま御はしめ御子たち嘸々御成長遊候半んと申くらし居候、毎日々々こま⁽¹⁾とそなた様の御うわさのミ申くらし居まいらせ候、誠にこの地は御あたゝかに御坐候て私のさむかりも今年はあまりさむく御坐無く、しこく時季よろしく候故この地え参り候よりいまた一日も風も引不申、しこく丈ふに候故これ又御意安御思召可被下候、まづは御始年迄に申上候、万々年めてたくかしく

とふそ此文林氏え御とゝけ御願申上まいらせ候
池田御姉様⁽²⁾ 人々御めて度申上候
神内きね

寿

- (1) こま 東京より連れてきた女中.
- (2) 池田謙齋妻 幾子.

4 明治(16)年(2)月15日 (1033)

一筆しめし上まいらせ候、日ま(し)に御寒さきひしく候半候へ共、折から其御地ニても御兄上様御はしめ皆々様にも御機嫌よく御めてたく存上まいらせ候、御兄上様にも相かハラす相かハラす御いさましく御つとめ遊し候御事如何斗御嬉敷これ又御悦ひ申上まいらせ候、左様ニ候へハこの程は色々品物御をくり遊し被下、殊にのりハ大坂にハ東京のやうなるのりハ御坐無候故、朝夕にちやうほういたし御礼山々申上まいらせ候、つむりかけ切すごろくも此地にはよきしぼりすころく御坐無く候故大事にいたし、折々出し候てハ楽シミにいたし居まいらせ候、緒方御隠居様⁽¹⁾にも色々と御せわのミいたゝき候故吉重様⁽²⁾えよろしく御

礼恐入候へ共、御前様より御願申上まいらせ候、筆末乍其皆々様ニ宜敷御鳳声御願申上まいらせ候、こまよりも色々御とし玉いたゞき候故ニ御礼よろしく申上たき申出まいらせ候、何も御礼のミ万々申上まいらせ候、めてたくかしこ

かへすかへすも時季御いとひ遊し候やうニ申上候、御前様にも御産前⁽³⁾ 故其御身御大切に御養生専一に遊し候やうに神いのり居申上まいらせ候、御子たちえよろしく申上候やう御願申上候、以上

池田御姉上様 人々御礼 神内きね

(欠) 月十五日

(1) 緒方洪庵妻 八重子。明治19年2月7日没。

享年65。

(2) 吉重 緒方^{よしえ}惟^{これよし}準の妻。緒方惟準は明治13年より20年まで軍医監・軍医本部次長として東京に居住。

(3) 池田謙齋の三男 謙三は明治16年3月8日に生まれる。後に久子の弟 鈴木亮蔵の養子となり鈴木謙三を名乗る。

[67] 須田卓爾の書簡

須田卓爾は眼科医。明治2年生まれ。25年ドイツ留学。29年帰国。明々堂医院長。東京医専眼科教授。昭和16年没。享年73。(1869-1941)

1 明治29年3月17日 (1086)

拜啓、春暖之候益御清福奉慶賀候、陳は小生儀無事帰朝、今般亡哲造ニ継き明明堂ニ於て開業仕候、就てハ右御披露之為本月廿三日午後四時上野精養軒ニ於て乍粗末晚餐差上度奉存候、御貴臨被下候ハ、誠ニ光榮之至リニ御座候、恐惶敬白

三月十七日 須田卓爾

池田謙齋殿

追白、御諾否共乍御手数来ル十九日迄に拙宅へ御通知被下候様奉願候

(印刷物)

[68] 関成功の書簡

関成功は信州出身。陸軍2等軍医。明治24年没。

1 明治11年10月25日 (1014)

(封筒表) 駿河台南^(マツ)甲賀町 池田謙齋様

四谷町^(マツ)□□九番地 関成功

(封筒裏) 十月廿五日 (消印 十一年一〇月)

本日は途中失礼之段御許免被成下度奉願候、扱田島少佐尿検査仕候処、蛋白質多量ニ相合居他ニ酸性之格別之含物も相見え不申候間、右之段心得迄ニ申上置、尚近日参上之節委細申上度、草々頓首

十月廿五日

成功

池田先生

[69] 外浦文徳の書簡

詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治 年 月26日 (3117)

ニニ取込中ニ付愚筆乱筆此段仁恕奉願候、将又投葉等ニ御気付有之事ニ御座候得は誠ニ以恐入候得共御指揮奉願上候

前文略此段仁恕奉祈候、然は毛利正二位公近従林乙熊ナル者本月八日より肋膜炎ニ罹り候ニ付実⁽¹⁾、吐根⁽²⁾、遠志、老水⁽³⁾等ノ水剂致、痛ミ有之節甘汞⁽⁴⁾、阿片、硝剥⁽⁵⁾等ノ丸薬投薬仕、解熱剂ニハ撤曹⁽⁶⁾、安質歇希林⁽⁷⁾或ハ塩キニーネ等投薬仕候処、初日ハ三拾八度五六分ノ処、追日下降致解熱剂投セサルモ十四日十五日ハ三拾七度五六分ニ相降り申候、然ル処国重社寺局長⁽⁸⁾老母ハ患者ノ姉ナル処、過月来大患ニ罹リ諸医快氣ノ見込無之由申来候ニ付其方へ是非参り度旨申入、十五日夕刻参り候処、翌十六日ハ又々三拾八度以上ニ相昇り、尤二三日前より朝三十八度二分、午后ハ三十八(度)四分位ニ御座候間、氷ノ冷罨法ノミ致置、然ル処昨日より塩キニーネ〇・五朝投薬仕候処、昨日午後ハ三十七度七分、今朝ハ三十七度九分位ヒニ相降り候得共、何分大患之事ニ御座候得は、公ハ不及申ニ家扶等よりも先生ニ御来診頼度候様申入候間、遠方之処恐入候得共御縁合セヲ以御来診之程奉希上候、右ニ付右患者俸林正策ナル者差上候間、何卒此者へ御答奉希上候、万一御留守中ニ御座候得は前日端書ニテ御尊来之時日刻限等拙者方迄御鳳声奉希上候、余は拜顔之上万々奉申謝候、先ハ要斗愚書如斯御座

候, 草々頓首

廿六日

外浦文徳 拜

池田薬局御中

- (1) 実^じ菱^{まき} 薬用植物ジキタリス. 強心剤.
- (2) 吐^と根^{こん} アカネ科薬用植物の根. 催吐剤・発汗・去痰剤.
- (3) 老水 ローレル水. 鎮咳剤・麻醉剤.
- (4) 甘汞 塩化水銀.
- (5) 硝^じ剝^{りゃく} 硝酸加里. 利尿剤.
- (6) 撤^{てつ}曹^{そう} サルチル酸ソーダ. 解熱剤・鎮痛剤.
- (7) 安^あ質^し歇^じ希^き林^{りん} アスピリン. 解熱剤・鎮痛剤.
- (8) 国^{くに}重^{しげ}正文^{まさふみ} 萩藩士. 天保11年生まれ. 明治20年寺社局長. 東京國學院々長歴任. 34年没. 享年62. (1840-1901)

[70] 高木兼寛の書簡

高木兼寛は海軍々医. 成医会講習所(東京慈恵会医科大学の前身)等を設立. 兼寛の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に5通掲載に付き省略.

[主要参考文献]

- 朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社 1994年11月30日発行
池田文書研究会編『東大医学部初代総理池田謙斎』上・下巻 思文閣出版 2007年2月25日発行
日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館 1981年9月10日発行
遠藤正治著「明治期の侍医制度と池田文書」『東と西の医療文化』吉田忠・深瀬泰旦編より 思文閣出版 2001年5月11日発行
大植四郎編『明治過去帳』東京美術 1971年11月20日発行
稲村徹元・井門寛・丸山信編『大正過去帳』東京美術 1973年5月15日発行

(本稿に於いて詳細不明の医師 内田頼輔・欠下友造・佐竹重義・里見文建・外浦文徳に就きご知見のある方は順天堂大学医学部医史学研究室までお知らせ下さい. 尚岩井禎三に就いては判明しましたので後日補記します.)